

嶺南地域（小足谷から銅山峰まで）ガイド

1 小足谷（こあしたに）集落エリア

(1) 小足谷酒造場

- ・別子銅山支配人・広瀬幸平の意向で、明治3年（1870）設置。
- ・明治15年（1882）醸造課の設置で、口に合う酒造ができた。
- ・後年、酒のほかにも味噌、醤油の醸造も行う。
- ・酒は「イゲタ正宗」（別名：鬼ごろし）と呼ばれ、最盛期には年間100キロを製造。一升瓶換算では、年間約55,600本。
- ・明治44年（1911）醸造休止、大正3年（1914）廃止。



小足谷酒造場の煙突

(2) 接待館

- ・元は個人経営の「泉亭」であったという。
- ・明治34年（1901）に改装し、要人や賓客をもてなす「別子接待館」として開業。
- ・目出度町（めったまち）にあった「住友新座敷」の後継施設の位置付けで、住友家15代当主・友純（ともいと）も宿泊。
- ・接待館敷地内には、庭園も整備されていたという。
- ・昭和30年代はすすきヶ原、現在は檜が植栽されている。



小足谷の接待館跡地

(3) 採鉱課長宅

- ・別子銅山副支配人クラスまたは採鉱課長クラスの備員が生活していた小足谷集落の高級住宅。
- ・集落の高台にあり、高さ約3mの赤レンガ塀に囲まれ、周りから邸宅内を見ることができない警固な造り。
- ・横井戸方式である専用の取水場も完備。
- ・小足谷集落には、運輸課長クラスの備員が生活する住宅も整備されていた。



採鉱課長宅の赤煉瓦塀

(4) 小足谷収銅所

- ・小足谷疏水坑の排水から沈殿銅を採取し、中和処理して銅山川へ放流するため、明治31年（1898）に足谷川の右岸側に設置。
- ・沈殿銅採取のために使用されたと思われる鉄片が現存。
- ・明治35年（1902）に第三通洞が開通し、明治38年（1905）から、別子銅山の坑内排水のほとんどを第三通洞から東平収銅所並びに山根収銅所経由で収銅、中和処理した後に新居浜から海へ放流することになったことから、小足谷収銅所は、明治39年（1906）に廃止。



小足谷収銅所



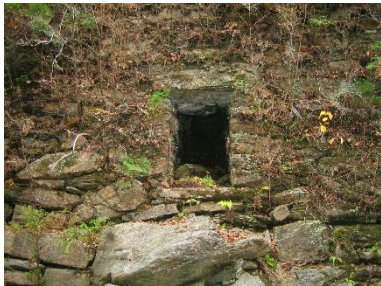
小足谷小学校の跡地



小足谷劇場（土木課倉庫）跡



黒橋に残る厨房設備



高橋製錬所の石垣



ダイヤモンド水

(5) 小足谷小学校

和 暦	西暦	小学校のあゆみ
明治 19 年	1886	小足谷酒造場横に住友私立小足谷尋常小学校開校
明治 22 年	1889	小足谷劇場隣接地に校舎を新築、移転
明治 32 年	1899	児童数 298 人、教職員 7 人の記録
明治 34 年	1901	住友私立別子尋常高等小学校と校名変更
大正 3 年	1914	失火により校舎を焼失、児童は他校へ転校
大正 4 年	1915	開校

(6) 小足谷劇場

- ・本来は、土木課の倉庫として建設された。
- ・明治 23 年（1890）別子開坑 200 年祭の会場のひとつ。
- ・毎年 5 月に開催される山神祭には、別子山中の住民のための娯楽施設・劇場として解放。
- ・収容人員は 2,000 人ともいわれ、上方から歌舞伎の名優も来山したという。

2 黒橋（くろはし）・高橋（たかばし）集落エリア

(1) 住友病院別子山出張所と病院関係者と思われる住宅

- ・住友病院は、集落の下方移行で、風呂屋谷から黒橋へと移転。
- ・住友病院別子山出張所跡には、カラムレンガの門柱らしき遺構と水槽らしき立方体の堅穴が残る。
- ・病院敷地の横の階段を下ると、赤レンガ造りの厨房設備の遺構がある。当時としては西洋風の設備であることから、高給待遇の病院関係者（医師等）が住んでいた住居跡と推定。

(2) 高橋製錬所（たかばしせいれんじょ）

- ・高橋は、明治 13 年（1880）から明治 32 年（1899）にかけて、旧別子銅山地域における製錬拠点地域であった。
- ・別子銅山における山元製錬では、初の洋式製錬所を建設。
- ・明治 13 年（1880）に大熔鋳炉が完成。
- ・高橋の足谷川左岸一帯に、複数の製錬所を建設。
- ・新居浜地域の煙害発生により、製錬機能拡充が検討された。
- ・明治 32 年（1899）の別子大水害で壊滅的な被害発生、廃止。

(3) ダイヤモンド水

- ・昭和 26 年（1951）、奥窯谷の上部にある別子本山鋳床に属する金鍋鋳床の探鋳調査の際に水脈に当たって以来、常時、湧水。
- ・探鋳調査に使用したロッドの先端部（ダイヤモンド）が外れ、孔底に残ることがダイヤモンド水という名前の由来。
- ・登山道上で、唯一、飲料できる水として知られる。
- ・p h 8.78（弱アルカリ性）、硬度 20 の軟水。（平成 16 年調査）
※南アルプスの天然水、ボルヴィック等と同程度の軟水。



高橋沈殿池（吹方収銅所）

（4）高橋沈殿池（たかばしちんでんち）（吹方収銅所）

- ・明治13年（1880）に吹方収銅所が設置された記録あり。
- ・高橋には、現在も稼働している山根収銅所と同じように、傾斜のある沈殿池の遺構がある。
- ・高橋沈殿池は、足谷川左岸側、現登山道の少し上部にある。
- ・地理的には、天満水抜き間符（東延西走坑・貳番抜戸）や代々水抜き間符からの坑内排水処理施設と推定。

3 東延（とうえん）集落エリア

（1）第一通洞（南口）（代々間符・代々水抜き間符）



第一通洞（南口）

- ・かつて疏水坑であった旧代々水抜き間符を再活用。
- ・明治15年（1882）に開削着手し、明治19年（1886）に開通した別子銅山初の本格的水平運搬坑道。
- ・第一通洞の開削に、他の鉱山に先駆けてダイナマイトを使用。
- ・明治41年（1908）、坑内にて短縮坑道が完成し、延長は1,021mとなる。
- ・南口は東延谷、北口は嶺北の角石原、標高は共に約1,100m。

（2）東延谷築堤（とうえんだにちくてい）と暗渠（あんきょ）



東延谷築堤と暗渠

- ・東延谷築堤は、旧別子銅山地域最大の石垣遺構で、面石は背後の山から採石した蛇紋岩を使用。
- ・東延谷築堤建設起業は明治16年（1883）に着手し、明治18年（1885）に完成。
- ・暗渠に赤レンガ約30万枚使用、内部は2方向に分かれている。
- ・東延谷築堤上に、東延事務所（採鉱本部）、東延選鉱場、東延機械場、東延斜坑など重要施設が建設され、東延時代を築く。

（3）東延斜坑



東延斜坑

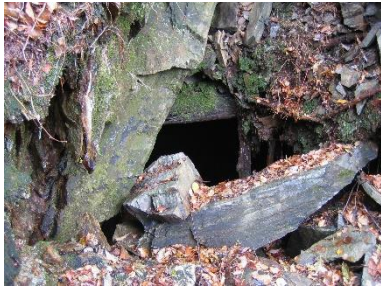
- ・住友が雇用したフランス人鉱山技師レイ・ラロックの案に基づいて開削された本格的な斜坑。
- ・明治9年（1876）から開削に着手したが工事は困難を極め、完成したのは明治28年（1895）。
- ・傾斜49度、延長526mであるが、幅6m、高さ2.7mと当時としては超大型の規模を誇る坑道。
- ・昭和5年（1930）使用中止、昭和7年（1932）廃止。

（4）歓治間符（かんじまぶ）、東山間符（ひがしやままぶ）ほか



歓治間符

- ・東延地域の間符は、絵図に複数の同名間符が記録されており、判別が困難。（東山間符3か所など）
- ・歓治間符は、旧くは東山間符や東延歓治間符とも記録され、東延斜坑完成までは東延本舗として採鉱され、鉱石を搬出。
- ・歓治間符に隣接して、東延東走坑がある。
- ・東延斜坑の周辺には、東延新口間符（東山間符）と天満水抜き間符（東延西走坑・貳番抜戸）がある。



東山間符

- ・東延斜坑の南、約 20m 上部には、東山間符がある。
- ・東山間符の坑口前には、トロッコ軌道の一部が残存。
- ・明治 33 年（1900）の写真にある歓治間符上部に開削されていた東山風廻しは、潰れ込みの模様。
- ・東延築堤にも坑口と思われる遺構がある。（仮称：東延築堤坑）
- ・東延築堤の暗渠の下流・右岸側には、東延風廻しがある。
- ・別子銅山史上、歴史が現代に近い東延地域一帯は、産業遺産の宝庫。



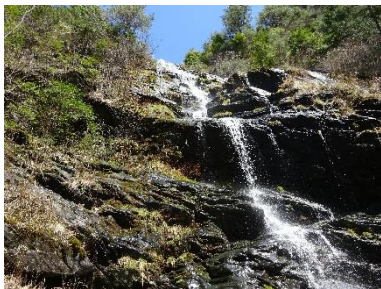
竜王神社の常夜灯（石灯籠）

（5）竜王神社（りゅうおうじんじや）

- ・旧別子銅山地域には、集落ごとに氏神を祀る神社があった。
- ・東延集落には竜王神社があり、当初は東延斜坑の北西側に建立されていたが、後に北東方面の集落上部に奉遷。
- ・当初の竜王神社跡には、明治 44 年（1911）に氏子によって奉納された常夜灯（石灯籠）が現存。
- ・当初の竜王神社周辺には、坑夫が修行した形跡もある。

（6）素麺滝（そうめんたき）（東延滝）

- ・素麺滝は東延滝とも記され、明治 14 年（1881）と明治 31 年（1898）に住友が製作した別子鉦山写真帳の被写体となる。
- ・東延谷川の上流部にある素麺滝の落差は約 15m。



素麺滝（東延滝）

4 天満（てんま）・木方（きかた）・山方（やまかた）集落エリア

（1）天満間符（てんままぶ）

- ・天満間符は、元禄 15 年（1702）の「別子銅山振興意見書」に記録され、開坑当初は出鉦坑道であったが、後に通気、排水に活用。



延喜の端（大山積神社）

（2）延喜の端（えんぎのはな）と大山積神社（おおやまづみじんじや）

- ・元禄 4 年（1691）開坑直後、瀬戸内海に浮かぶ大三島の大山祇神社から、銅山の守護神として大山積神社を勧請し、旧別子銅山一帯が見渡せる延喜（縁起）の端に神社を建立。
- ・延喜の端から下部を流れる足谷川に向けての山斜面に、歓喜・歓東間符が別子本舗であった頃には、200 とも 300 ともいわれる多数の焼鉦窯を配置。（下の床屋）
- ・大山積神社は、明治 26 年（1893）、対岸の目出度町へ遷宮。



大伐間符（大切間符）

（3）大伐間符（おおぎりまぶ）と長榮間符（ちょうえいまぶ）

- ・大伐間符は大切間符とも記され、現在は潰れ込み。
- ・大伐間符は 2 か所の坑口あり、そのうち 1 つは疏水坑。
- ・大伐間符付近には、焼鉦窯の石積遺構がある。
- ・長榮間符は長永間符とも記され、現在は潰れ込み。
- ・長榮間符は、当初は採鉦目的で開削されたと思われるが、後年は歓東間符や大伐間符の風廻しとなった模様。



歓喜間符 (左) と歓東間符 (右)



中西間符



風呂屋谷の牛車道



大和間符 (本坑)



別子銅山の大露頭

(4) 歓喜間符、歓東間符、床屋間符、中西間符ほか

- ・歓喜間符は、元禄4年(1691)別子開坑の舞台。
- ・歓東間符は、歓喜間符に次ぐ旧坑と思われる。
- ・歓喜間符は、歓東間符とともに別子本舗を形成し、明治時代中期頃まで、別子銅山の鉱石のほとんどを両間符から搬出。
- ・歓喜間符は、後年、寛永谷の旧立川銅山・都間符と連絡し立川銅山方面の鉱石の搬出口となり立川歓喜と呼ばれ、歓東間符は、別子側鉱石の主要搬出口となったことから別子歓東と呼ばれる。
- ・床屋間符は潰れ込みであるが、坑口に隣接して露頭線が走る。
- ・自在間符は、中西間符と床屋間符の間にあったと思われるが不明。
- ・中西間符は2か所あり、北は疏水坑、東は出鉱坑道と推定。
- ・中西間符は、元禄の時代から床屋間符と歓喜間符に連絡していた。
- ・中西間符は、明和6年(1769)の記録では休坑。
- ・中西間符は谷間坑とも記され、文献にある中西山間符は、中西間符と同一と思われる。
- ・鍛冶屋谷広場で、山方の太鼓台が組み立てられたという。

(5) 牛車道 (ぎゅうしゃみち・ぎっしやみち)

- ・牛車道は、目出度町の勘場と新居浜口屋を結ぶ延長約28kmの住友が開設した牛車による輸送を可能にした運搬路。
- ・明治8年(1875)に完成したルイ・ラロックの『別子鉱山目論見書(べっしこうざんもくろみしょ)』にて提案されていた馬車道開設を、広瀬幸平の意向で牛車道に変更して明治9年(1876)に開削着手、明治13年(1880)全線が開通。
- ・嶺南地域(前山、山方、風呂屋谷、目出度町周辺)の牛車道は、現在、登山道として利活用。

(6) 大和間符 (やまとまぶ)

- ・大和間符は、絵図などによると4か所の坑口が記録されているが、現在、3か所が確認済み。
- ・大和間符は、元禄8年(1695)に立川銅山側の大黒間符と地中にて坑道が抜き合い、境界紛争が発生。
- ・元文4年(1739)の記録では稼行中であるが、明和6年(1769)と文化元年(1804)の記録では稼行されていない。
- ・大和間符は、後年、歓喜間符の風廻しとなった模様。

(7) 大露頭 (だいろとう)

- ・露頭とは、鉱石が地表に現れている状態をいい、別子銅山の場合、銅鉱石が地表において酸化し、赤黒く変色している。
- ・大和間符に近い大露頭を訪れた俳人の山口誓子は、

「大露頭 ^{あか} 赫くてそこは 雪積まず」と詠んだ。

- ・山口誓子の上記の句を彫った石碑は、現在、住友金属鉱山(株)別子事業所事務所入口前に設置。



峰地藏

(8) 峰地藏 (みねじぞう)

- ・銅山峰の鞍部：銅山越（標高 1,294m）にある石垣の中には3体の石仏が安置され、無縁仏を祀っている。
- ・旧暦8月24日は峰地藏の縁日であり、近くの舟窪（現在は湿地帯となっている）で子どもたちの相撲大会が行われ、賑わっていた。

5 風呂屋谷・永久橋・目出度町 (めったまち) 集落エリア

(1) 風呂屋谷の清水



風呂屋谷の清水

- ・風呂屋谷に清水（飲料水）が採れる水場が今も残るが、当時、嶺南地域に住む子どもの役目が、ここでの水汲みだったという。
- ・風呂屋谷集落には、清水のほかに岩清水取水場（横井戸方式）もあり、別子山中の集落の中では、生活水に恵まれていた地域と思われる。
- ・風呂屋谷集落の観音堂跡地は、後に小学校、住友病院、自彊舎が建てられる。

(2) 蘭塔場 (蘭塔婆) (らんとうば)



蘭塔場 (蘭塔婆)

- ・蘭塔場が築かれる以前は、この岩山には観音堂があった。
- ・蘭塔場は、元禄7年（1694）に発生した別子大火災の犠牲者・元締の杉本（泉屋）助七以下132人の慰霊のために設けられた。
- ・旧別子銅山撤退に伴い、墓碑は瑞應寺へ移転されたが、現在も盆の時期には、住友金属鉱山(株)関係者がここを訪れ、連綿と供養されている。

(3) 目出度町の勘場 (かんば) と大山積神社



目出度町の大山積神社跡 (狛犬)

- ・目出度町の勘場は、支配人や手代など別子銅山の役員クラスが詰めていたところで、銅蔵や食糧倉庫、資材庫なども管理。
- ・明治25年（1892）、勘場は対岸の木方集落へ移転し、その跡地に大山積神社が延喜の端から遷宮された。
- ・勘場に隣接して、住友新座敷という接待館があった。
- ・目出度町は、大商店の小泉商店「伊予屋」や料亭旅館「一心楼」が営業するなど、明治前期には商人のまちとしても賑わった。

6 見花谷 (けんかたに)・両見谷 (りょうけんたに)・裏門 (うらもん) 集落エリア

(1) 見花谷、両見谷、裏門の稼人住宅



両見谷 (左) と見花谷 (右)

- ・見花谷、両見谷の両集落には、別子銅山の稼人たちの住居が谷の山斜面沿って建築されたが、明治32年（1899）8月の台風襲来による鉄砲水の発生で壊滅状態となる。（別子大水害）
- ・裏門集落には炭蔵のほか、炭方と呼ばれる製錬に関わる稼人の住居も建設。



小足谷疏水坑



東延東走坑



天満間符



排気斜坑



金鍋第1坑

本山鉾床嶺南側（三縄層上部）の間符・坑口

No.	間符・坑口名	場所	標高	状態
1	小足谷疏水坑	小足谷	915m	×
2	東山間符	東延	1,180m	△
3	東山風廻し	東延	不明	—
4	東延東走坑	東延	1,160m	○
5	歓治間符	東延	1,160m	○
6	東延斜坑	東延	1,160m	○
7	東延新口間符	東延	1,160m	△
8	天満水抜き間符（貳番抜戸）	東延	1,160m	△
9	東延風廻し	東延	1,130m	○
10	東延築堤坑	東延長	1,135m	△
11	第一通洞（南口）	東延	1,100m	○
12	天満間符	天満	1,175m	△
13	寛政谷風廻し	寛政谷	1,195m	△
14	大伐間符	寛政谷	1,185m	△
15	大伐間符（疏水坑）	寛政谷	1,185m	×
16	排気斜坑	鍛冶屋谷	1,180m	○
17	長榮間符	山方	1,215m	×
18	歓東間符	山方	1,205m	○
19	歓喜間符	山方	1,205m	○
20	床屋間符	山方	1,245m	×
21	中西間符	前山	1,270m	○
22	中西間符（疏水坑）	前山	1,270m	×
23	自在間符	前山	不明	—
24	大和間符（東坑）	前山	1,290m	○
25	大和間符（中坑）	前山	不明	—
26	大和間符（本坑）	前山	1,290m	○
27	大和間符（西坑：疏水坑）	前山	1,290m	○
28	西山間符	前山	不明	—

※標高は推定値、状態は主観的な判断。

※東延築堤坑は仮称。

本山鉾床嶺南側（三縄層主部：金鍋地域）の坑口

No.	坑口名	場所	標高	状態
1	金鍋第1坑	金鍋	1,360m	○
2	金鍋第2坑	金鍋	1,310m	○
3	金鍋第3坑	金鍋	1,280m	○

※標高は推定値、状態は主観的な判断。



落シ橋（遠登志橋）



第二次泉屋道の石ケ休場



東端索道中継所



東端索道のセリ割隧道



東平のペルトン水車設置跡地

嶺北地域（落しから角石原まで）ガイド

1 落し（おとし：遠登志）、東平（とうなる）エリア

(1) 落し橋（遠登志橋）

- ・鋼鉄製アーチ橋である橋長 48.25m、幅員 2.4mの落し橋は、明治 38 年（1905）に別子鉱業所土木課によって架設。
- ・ワイヤーロープ吊り橋（遠登志橋）は、平成 5 年（1993）架設。
- ・遠登志橋（登録名）は、平成 17 年（2005）登録有形文化財に。

(2) 第二次泉屋道（いづみやみち）の石ケ休場（いしがやすば）

- ・石ケ休場とは、仲持ちが休憩するために設けられた石で造った休憩所で、泉屋道の道中には複数あった。
- ・石ケ休場は、仲持ちが背負子を背負ったまま（立ったまま）休憩できる、簡易で効率的な休憩所。
- ・遠登志～東平間の第二次泉屋道は、元禄 15 年（1702）から昭和 43 年（1968）までの間、鉱山関係者とその家族が生活道として利用。

(3) 東端索道（とうたんさくどう）（東平・端出場間索道）

- ・型式 ブライヘルト複線式
- ・運搬量 67.5 t/h
- ・延長 2,717m（東平～端出場）
- ・高低差 545m
- ・最大径間 578m
- ・両線間隔 2.5m
- ・支柱本数 26 本
- ・最高支柱 27.5m
- ・支柱種類 鉄製方錘型
- ・搬器積載量 560 k g
- ・搬器自重 225 k g
- ・搬器間隔 75 k g
- ・製作所 ドイツ ブライヘルト
- ・設置年月 明治 38 年（1905）7 月
- ・廃止年月 昭和 43 年（1968）9 月

(4) 東平のペルトン水車設置跡地

- ・ペルトン水車とは、落差の大きい地点の発電所に使用される衝動水車のこと。
- ・ペルトン水車は、多数のわん形のバケットに、ノズルから噴出されたジェット水流を衝突させて回転させる方式。
- ・ペルトン水車の実物は、旧端出場水力発電所にて見学可能。
- ・明治 28 年（1895）に設置された東平・中ノ橋のペルトン水車は、主に第三通洞開削削岩機用の電力を確保するために利用。



第二通洞（児島案）

（5）第二通洞（児島案）

- ・住友別子鉱山史上、第二通洞は2か所ある。
- ・東平・中ノ橋の第二通洞は、当時の土木課長・児島芳次郎の上申により、明治20年（1887）に開削着手。
- ・第二通洞（児島案）は、明治22年（1889）、人力による開削の限界と換気の悪化により開削中止。
- ・2つの第二通洞は、いずれも未完成。（もう1か所は寛永谷）
- ・未完成の第二通洞は、幻の通洞とも言われる。



第三通洞

（6）第三通洞

- ・第三通洞は、柳谷川と寛永谷川が合流し足谷川（悪し谷川）となる東平の地・標高747mに開削。
- ・明治35年（1902）に東平坑口から東延斜坑底まで延長1,795mが8番坑道レベルで開通、坑内水を排水する坑水路も併設。
- ・明治44年（1911）開通の日浦通洞（日浦坑口～東延斜坑底：延長約2,120m）とも連絡し、端出場水力発電所への導水路も併設。

2 角石原（かどいしはら）エリア

（1）第二次泉屋道（馬の背）



馬の背番所跡の石仏

- ・元禄15年（1702）開設の第二次泉屋道は、足谷山から銅山越、角石原、馬の背（番所）、東平、落し、立川渡瀬（中宿）を經由して、新居浜口屋へと至る約18kmの人力輸送路。
- ・足谷山から立川中宿まで物資運搬した立川仲持ちは約300人。
- ・第二次泉屋道の難所は、急こう配の狭い尾根筋を歩かなければならない嶺北の馬の背。
- ・道中の安全祈願のため、要所には石仏が祀られている。

（2）別子鉱山鉄道上部線（角石原停車場）



上部鉄道の角石原停車場跡

- ・標高約1,100mの角石原は、第二次泉屋道の中継所、牛車道の中宿が置かれるなど、嶺北における交通の要所。
- ・明治26年（1893）の上部鉄道開設時の停車場（駅）は、角石原、一本松、岩井谷、石ヶ山丈の4停車場。（のち岩井谷は廃止）
- ・角石原には、選鉱場、焼鉱窯など鉱山施設や目出度町の小泉商店「伊予屋」の支店や茶屋など商業施設もあった。
- ・輸送能力：仲持ち40kg/人→牛車340kg/車→鉄道20,000kg/列車

（3）第一通洞（北口）



第一通洞（北口）

- ・明治15年（1882）に開削着手、明治19年（1886）に開通した別子銅山初の本格的水平運搬坑道で、南口は東延にある。
- ・明治41年（1908）に短縮坑道が完成し、最終的に延長は1,021mとなる。
- ・第一通洞の開削に、他の鉱山に先駆けてダイナマイトを使用。
- ・第一通洞内運搬は馬引鉱車が主であったが、牛車や人力による運搬も行われた。

本山鉾床嶺北側の間符・坑口



寛永間符



新長尾坑



新太平坑



金栄間符



大黒間符

No.	間符・坑口名	場所	標高	状態
1	第四通洞	端出場	156m	○
2	大斜坑	打除	210m	○
3	第二通洞 (児島案)	東平	700m	○
4	第三通洞	東平	747m	○
5	第二通洞	寛永谷	955m	○
6	寛永間符	寛永谷	1,010m	○
7	新長尾坑	寛永谷	1,070m	○
8	長尾坑	寛永谷	1,095m	×
9	新太平坑	寛永谷	1,100m	○
10	太平間符	寛永谷	1,100m	×
11	新都坑	寛永谷	1,160m	○
12	都間符	寛永谷	1,160m	×
13	金栄間符	寛永谷	1,180m	△
14	大黒間符	寛永谷	1,230m	○

※標高は推定値、状態は主観的な判断。

(ア) 寛永間符 (かんえいまぶ) (立川銅山・別子銅山)

- ・立川銅山時代の正徳元年 (1711)に開削着手、安永5年 (1776)の貫通時には、住友家による経営となっていた。
- ・疏水専用坑として開削され、天明8年 (1788)からは嶺南にある別子本舗 (歓喜間符・歓東間符)の坑内水の排水も担っていた。

(イ) 新長尾坑 (しんながおこう) (別子銅山)

- ・新長尾坑は、孔雀石の採掘が行われていた可能性がある。

(ウ) 新太平坑 (しんたいへいこう) (別子銅山)

- ・新太平坑は寛永谷にあって、住友により開削された出鉾坑道で、鉾石は太東索道 (たいとうさくどう)で東平貯鉾庫へと搬送されていた。
- ・坑口は幅約3.3m、高さ約2.8mで、寛永谷にある坑口では最大。

(エ) 金栄間符 (きんえいまぶ) (立川銅山)

- ・坑口の隙間から見える坑内は、六角柱が支柱に使用されており、江戸期の坑内の様子を伝えている。
- ・『別子開坑二百五十年史話』掲載の写真では、金栄間符が被写体になっていると思われる。

(オ) 大黒間符 (だいくまぶ) (立川銅山)

- ・立川銅山時代では、おそらく最も高地に開削された坑道。
- ・元禄8年 (1695)に別子銅山の大和間符と坑道が抜き合い、境界紛争が勃発。